

## 南葵音楽文庫アカデミー 令和3年度

和歌山県立図書館は、南葵音楽文庫プレオープン（2017年）以来、文庫が所蔵する資料とコレクションの基礎を築いた徳川頼貞を中心に、定期講座やミニレクチャーを、また昨年度からは南葵音楽文庫アカデミーを通じて、その内容や魅力を紹介してきました。資料整理の完了に加え3冊の記念出版をふまえ、より深く、さらに広い視座から、明治以降の紀州徳川とそこに連なる人々の文化貢献をとともに探り、ここ和歌山でその実際に触れ、意味と魅力を感じとることを目指したアカデミーを今年度も開講します。今秋開催される「紀の国わかやま文化祭2021」に関連し、「和歌山が伝える<南葵の記憶>」を織り込んだプログラムとしました。南葵音楽文庫とその資料を契機として、さらなる理解と学びの輪が育まれますことを期待します。

### 特別会場



和歌山県公館 洋館 (7月10,11日)



橋本市教育文化会館 (9月18日) 3F第1研修室

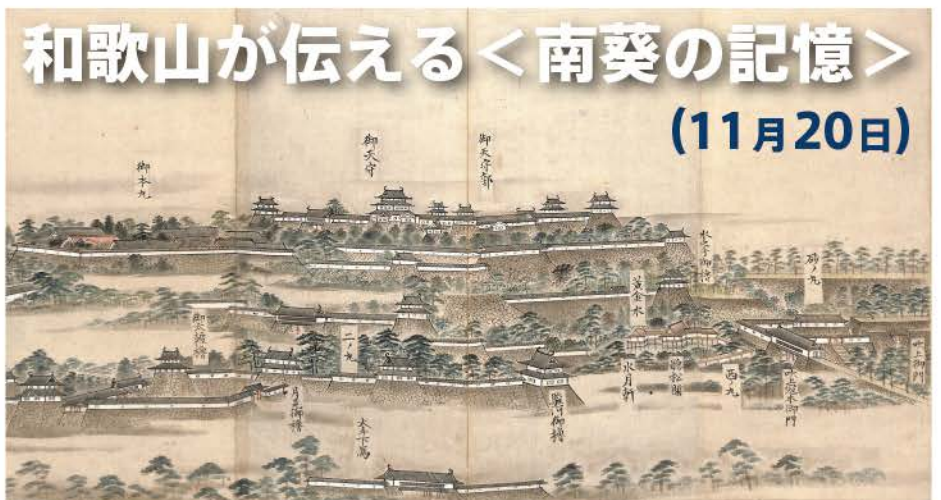


新宮市文化複合施設 丹鶴ホール  
(令和4年2月19日) 2F会議室

### メイン会場



和歌山県立図書館 (本館) 2F講義研修室



## 和歌山が伝える<南葵の記憶>

(11月20日)



紀州徳川400年を機に、記念出版や展覧会開催により、また南葵音楽文庫調査の過程で、南葵につながる資料・作品がつつぎに確認され、今もそれは続いています。県民篤志家により、社寺により、またむろん博物館等により、残され伝えられている資料群。その全容はまだ明らかではありません。それらのうち、今回は公立文化施設が所蔵している資料をご紹介します。

▼頼倫撮影の写真アルバム



※お問い合わせは…

和歌山県立図書館サービス課 ©073-436-9520  
〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

# 南葵音楽文庫と徳川頼貞を知る 3冊

紀州徳川400年、南葵音楽文庫の公開を記念し、この世界的な音楽文庫と音楽による貢献に生きた徳川頼貞を紹介する書籍が同時に刊行されました。この3冊には、今までほとんど知られなかった文化の豊穡と先駆的な行動、そして人間味が盛り込まれています。南葵音楽文庫を知り、それを巡る、そこから広がる世界を学び、楽しむことにつながるでしょう。

いま開く  
宝庫の内容と歴史  
いま明かされる真実



わいていがくわ  
**菅庭楽話**  
ISBN: 978-4-12-005419-8  
四六判 384ページ  
中央公論新社 3300円



**徳川頼貞侯の横顔**  
ISBN: 978-4-12-005420-4  
四六判 204ページ  
中央公論新社 2200円



紀州徳川400年 **南葵音楽文庫案内**  
ISBN: 978-4-12-005418-1  
A4判 オールカラー 96ページ  
ベートーヴェン自筆楽譜ファクシミリ付き  
中央公論新社 3300円

## 『菅庭楽話』に見る祖父の姿

中田基彦

冒頭から、私事で甚だ恐縮ですが、我が家には古色たる『菅庭楽話』の旧版が存在しておりました。その理由は、私の祖父・中田章の演奏歴が記されていたからです。1920（大正9）年11月22日、徳川頼貞侯爵が計画された、南葵楽堂の「パイプ・オルガン披露演奏会」初日にて、「(前略) 第三番目に東京音楽学校助教授中田章氏によって、パイプ・オルガンが演奏された。曲目はバッハの「プレリュード」で、これが日本に於ける初めてのパイプ・オルガンの高鳴りである」（新刊よりの引用）。当日のプログラムにも風琴・中田章と記されていました。その御本は当時、徳川頼貞侯爵より、直に献呈いただいたようです。誠に光栄なことでした。この一冊を宝物のように、母が保存していたのです。

“幻”とも言える旧版を辿りつつ、今回の新刊『菅庭楽話』を早速購入し、カットされていた貴重な記録の数々を改めて拝読し、「目からウロコが落ちるような」気持ちを抑えることができませんでした。

明治維新以来150年余、「洋楽（再）事始め」の流れのなかで、ピアノ、ヴァイオリンの幸田延氏が、我が国最初の公費留学生としてアメリカ・ボストンを経て、ウィーンに留学されたのが1890（明治23）年のこと。

ヨーロッパの音楽事情もあまり判らぬまま、手探り状態の留学決行だったことでしょう。しかも、雅楽の精神・技術を引きずりながら、



**中田章 (1886-1931)**  
オルガニスト、《早春賦》の作曲家。東京音楽学校教授。南葵楽堂に設置されたオルガンを初演奏。この写真は屋代学校（長野県千曲市）に教えに行ったとき撮影されたと思われる。中田基彦氏提供。

一方の徳川公爵は、実弟の急逝という失意の中、いきなりロンドンを目指して留学されたのが1913（大正2）年。このたった23年の隔たりですが、当時の日本国の文化政策を背負っての幸田氏の“使命感”に対し、国の音楽派遣方針を横目でみながらの徳川侯爵は、幼少のころからレコード鑑賞、ピアノ、ヴァイオリンなどで素養を持たれた後、なかば自由なお立場での“遊学感”という根本的な相違（我が国の音楽体験史上）を読みとれました。

しかも、自ら「夢見る子供」と称され、なんと自由に、明るく西洋の要人と積極的かつ、物おじせず接し、知識、品格、語学力を駆使して吸収され、夢であった「南葵楽堂」「パイプ・オルガン」の設営を実現させた徳川氏の功績は多大であった、と感じざるをえません。

さらに、当時の日本ではSP録音でしか知りえなかったパティ（パッティ）、プッチーニ、ニキシュ、ブゾーニ、サン＝サーンス、ダンディー、特にカザルス・トリオ（ティボー、コルトー、カザルス）ら生の演奏家、作曲家との、真の交流の著述は今回の新版のハイライトです。

当時の時代考証も含めての校註をされた美山良夫先生のご苦労もたいへんだったでしょう。

最後に、この『菅庭楽話』他2刊の新刊発行の英断をされた和歌山県立図書館さまをはじめ、このプロジェクトに、携わられた関係者の方々に深く感謝を申し上げたく、結びとさせていただきます。

（筆者は音楽プロデューサー。中田章の孫）



## 夏 Summer

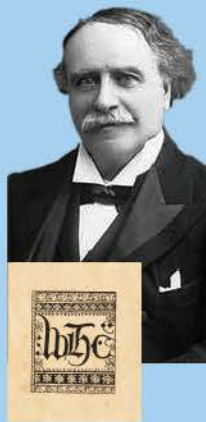
申込受付開始  
6月11日

Jul.10 .....和歌山県公館



### 徳川頼貞と板東ドイツ兵捕虜の音楽活動

南葵音楽文庫の近藤秀樹先生により、資料の中から板東俘虜収容所（現鳴門市）にて手書きで写されたと思われる楽譜が発見されました。徳川頼貞が板東を訪れて、ドイツ兵捕虜による第九演奏などを聴いたことはすでに知られています。今回はこのこと、捕虜たちの音楽活動にもやや重点を置いてお話しします。（担当：井戸慶治）



### カミングス文庫に生きる W.H.カミングス

カミングス文庫は、南葵音楽文庫の中核をなす蔵書群です。それは、19世紀のイギリスを代表する音楽蔵書家W.H.カミングス（1831～1915年）が収集した数千点に及んだであろう蔵書の一部にすぎませんが、そこからは彼の音楽への情熱や関心の在り処を読み取ることができます。この講座では、カミングス文庫の収蔵書の分析を通じてそれらの特徴を読み解き、さらに今日に活かす道を探ります。（担当：佐々木勉）

Jul.11 .....和歌山県公館



### 三浦環：1914年——ベルリンからロンドンへ

1914年8月のベルリンに焦点を合わせて、第一次世界大戦勃発時の緊迫した状況の中での日本人の行動を、三浦環、小倉末子、石倉小三郎、小泉信三、宇佐美濃守等に注目して追ってみようと思います。三浦環はこの時ベルリンからロンドンに避難し、ロンドンでの演奏が、その後の世界の三浦環となるきっかけとなりました。（担当：泉健）

### 熟覧と細見(2) アルベニス 《スペイン風セレナータ》



南葵音楽文庫のホルマン文庫はチェロ作品の宝庫ですが、文庫中の数少ないピアノ独奏曲のひとつが、スペインの作曲家アルベニスの《スペイン風セレナータ》。気になって調べてみたら、楽譜の表紙にはホルマンへの献辞が。どうやら二人の間には交友があったようです。この献辞を出発点に、スペインの作曲家の意外な一面を世紀末のロンドンに探ります。（担当：近藤秀樹）

## 秋 Autumn

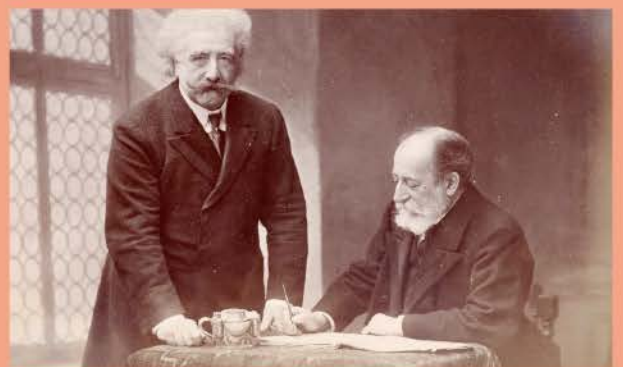
申込受付開始  
8月18日

Sep.18 .....橋本市教育文化会館

### シャルル・ルルーと南葵文庫(1)



南葵文庫が受入れた楽譜第1号は、フランス陸軍音楽隊長シャルル・ルルーの作品2冊です。ルルーは1884（明治17）年に来日、草創期の陸軍音楽隊の指導にあたりました。鹿鳴館時代の音楽シーンを彩った音楽家としてもよく知られています。滞日中に作品を発表するとともに日本および中国の音楽を研究、帰国後も研究を続けその成果を発表しています。今回は在日中のルルーの活動について紹介します。（担当：林淑姫）



### 徳川頼貞『薈庭楽話』その真実、残る謎(1)

華やかな交友や体験を語る頼貞。復刊のため校訂に取り組んでいると、行間に、紙背にもうひとりの頼貞が、もしかしたら本物の頼貞がいるように思えてもきました。ちょうど100年前、感染症流行が終息した直後、欧州を再訪した頼貞の覇気にみちた行動を、『薈庭楽話』には掲載されていない写真をもとにお話しします（おもに本書7～9章にあたります）。（担当：美山良夫）

Sep.19 .....和歌山県立図書館

### シャルル・ルルーと南葵文庫(2)



9月18日に続いて、帰国後のルルーの活動および1910年に発表された雅楽研究書を中心に、日仏文化交流に貢献したルルーについてお話しします。当日、南葵文庫旧蔵の当該研究書を紹介いたします。（担当：林淑姫）

### 徳川頼貞『薈庭楽話』その真実、残る謎(2)



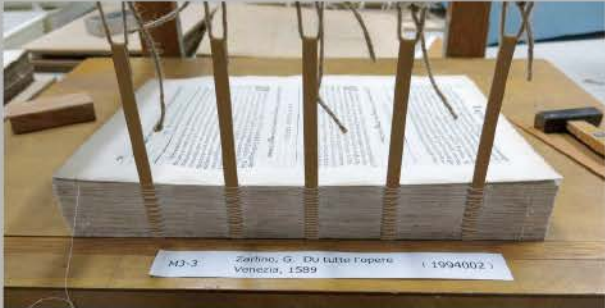
たかだか100年前なのに、いくら調べても判然とせず、結局校註がつけられず謎のまま残した女性や出来事も少なくありません。復刊の裏話や苦労話？ 否、そこにもまた本書を紐解く魅力があるのです。彼が『薈庭楽話』には丁寧に書かなかった真実をさがす旅、その旅の途からの報告をいたします（本書3,13章に関連した内容になります）。（担当：美山良夫）

右下のお申込み方法をご参照ください。

## 冬 Winter

申込受付開始  
10月20日

Nov.20 .....和歌山県立図書館



### 貴重資料の修復＝その心と技 南葵音楽文庫を例にして

国内ではあまり馴染みのない洋装本の修復について、行うにあたって守るべき原則や製本技術などの基本的な事柄を押さえつつ、南葵音楽文庫資料の修復作業を進めていく中で何を考えてどういう理由で技術・材料を選択してきたのかという点。さらに、資料に書かれている内容からだけでなく、それ以外の資料を構成する要素からも実に多くのことが分かることをお示しいたいと思います。そして、それらは各資料が持っている個性を知る手がかりともなります。(担当：飯島正行)

### 和歌山が伝える〈南葵の記憶〉

徳川頼倫は南葵文庫を関東大震災で焼失した東京帝国大学図書館に寄付しました。このとき南葵音楽関係資料は除かれ、現在の南葵音楽文庫の基礎となりました。実はその他にも徳川家に関する資料も除かれ、現在和歌山で所蔵されている貴重な資料があります。また頼倫、頼貞所縁の作品や写真も伝えられています。それらを紹介します。

※3月に開催した〈紀州徳川ゆかりの建築遺構〉の続編にあたります。

#### ■報告者

竹中康彦 (和歌山県立博物館)

坂口佐知子 (和歌山県立図書館) ほか

山青し 海青し 文化は輝く

## 紀の国わかやま文化祭2021

第36回国民文化祭・わかやま2021 第21回全国障害者芸術・文化祭わかやま大会  
令和3年10月30日(土)～11月21日(日)

応援事業

#### 重要資料報告会 [入場自由、申込不要]

令和3年11月20日(土) 11:00～12:00

和歌山県立図書館(本館) 講義研修室

調査によってあきらかになった点をふまえて、重要資料の要件にあてはまる資料を担当者が紹介します。

#### 南葵音楽文庫書庫見学会 [申込要]

令和3年11月21日(日) 11:00と14:00

和歌山県立図書館(本館) 南葵音楽文庫閲覧室/書庫  
閲覧室にて簡単なガイダンスをおこない、貴重書庫内の南葵音楽文庫資料を案内します。所要は約1時間です。各回10名程度、事前申込が必要です。

## 春 Spring

申込受付開始  
1月19日

Feb.19 .....新宮市文化複合施設(丹鶴ホール)

### 東くめの生きた時代と南葵音楽文庫



東くめ(1877年/明治10～1969年/昭和44)は、元新宮藩家老の由比甚五郎の長女として新宮に生まれました。彼女の生きた91年間、南葵音楽文庫の歴史を重ねながら、日本における西洋音楽の受容の歴史の一端を振り返ってみたいと思います。同級生の安藤幸や2年下の瀧廉太郎などとの交流も交えながら。(担当：泉健)

### 紀州藩付家老水野忠央の文化政策



徳川家康から徳川御三家につけられた家老(付家老)の新宮水野家の第9代忠央は、付家老という地位に満足せず、独立した大名に昇格するために他の御三家の付家老と連帯して幕府に待遇改善を願ひます。さらに忠央が、独立大名への一環として積極的に行った水野家の文化政策の実情とその意義について考察します。(担当：小山誉城)

Feb.20 .....和歌山県立図書館

### カサド・原コレクション×ホルマン文庫： 演奏家の資料と活用



玉川大学教育博物館が所蔵する「カサド・原コレクション」は、スペインのチェロ奏者ガスパール・カサド(1897-1966)とその妻でピアニスト原智恵子(1914-2001)夫妻の音楽活動に関する資料群

です。コレクションには、南葵音楽文庫を形成するコレクションのひとつ「ホルマン文庫」の持ち主であったチェロ奏者ジョゼフ・ホルマン作曲の楽譜や、徳川頼貞から原智恵子に贈られた『菅庭楽話』(普及版)が遺されています。演奏家の資料という側面からみられる共通点や音楽資料の持つ可能性などに目を向けていきたいと思っています。(担当：栗林あかね)

### 紀伊徳川家の文化政策



紀伊徳川家は、家康の意志によって新設された大名家です。初代頼宣は、父家康の死後元和5年(1619)に兄秀忠によって家康より与えられた駿

府城から和歌山城に移され、以後廃藩まで紀伊徳川家の支配が続きます。紀州に移された頼宣が、紀州藩主としてどのような文化政策を行ったか、その後の藩主にどのような影響を与えたかについて考察します。(担当：小山誉城)

# 講師紹介

50音順



**飯島正行**  
いいじままさゆき

(株)Conservation for Identity勤務。学習院大学卒業後、一般企業勤務を経てIstituto per l'Arte e il Restauro Palazzo Spinelli (Firenze)にて書籍、紙資料、紙作品の修復理論・技術を学ぶ。帰国後、現所属先にて南葵音楽文庫資料の他、東北大学附属図書館漱石文庫、東京国立博物館シーボルトコレクション、宮内庁書陵部所蔵洋貴重書等、公的機関、大学、企業の貴重資料の修復を行うとともに、文化財保存修復学会においてポスター発表も行っている。



**泉健**  
いずみけん

和歌山大学名誉教授。東京芸術大学大学院音楽研究科修了。著書に『音階と日本人』(柳原書店,1995)、共著に『音の今昔』(弘文堂,1996)、『西洋音楽の歴史』(東京書籍,1996)。異文化受容の際の文化変容に関心があり、これまで、明治以降の西洋音楽の受容によって、日本人の音階に関する音楽的感性がどのように変化してきたかということや、1900年(明治33)前後のベルリンで、西洋人が日本の伝統音楽をどのように受容したかを研究。現在和歌山大学、京都女子大学、和歌山県立医科大学、近畿大学で講師。



**井戸慶治**  
いどけいじ

徳島大学教授。鳴門市ドイツ館史料研究会会長。京都大学大学院修士課程(ドイツ語ドイツ文学専攻)修了。主な著書など:『松山のドイツ兵捕虜と収容所新聞「ラーガーフォイアー」』(鳴門市ドイツ館史料研究会編著、2019年、愛媛新聞社)、『ディ・バラック』(板東収容所の捕虜新聞)第3巻、第4巻(鳴門市ドイツ館史料研究会編訳、2005年、2007年)、『トクシマ・アンツァイガー—徳島俘虜収容所新聞—』日本語訳およびドイツ語版CDRom(鳴門市ドイツ館史料研究会編訳、2012年)、「初期テイクにおける芸術の自律性の思想」『シェリング年報』18号(日本シェリング協会、2010年)



**栗林あかね**  
くりばやしあかね

玉川大学教育博物館講師(学芸員)。玉川大学芸術学部パフォーミング・アーツ学科卒業、昭和音楽大学大学院音楽研究科器楽(ピアノ)専攻修了。大学図書館勤務を経て現職。G.カサドの未出版作品を中心としたシリーズ楽譜“Gaspar CASSADÓ x Tamagawa University Project Series”(風の音ミュージックパブリッシング)を手がける。



**小山譽城**  
こやまよしき

和歌山信愛大学・和歌山信愛女子短期大学非常勤講師。歴史学博士。著書に『徳川御三家付家老の研究』(清文堂出版、2006年)、『徳川将軍家と紀伊徳川家』(清文堂出版、2011年)。共著に『神道大系・神社編四十一紀伊・淡路国』(神道大系編纂会、1987年)、『奈良県・和歌山県の不思議事典』(新人物往来社、1998年)、『和歌山県謎解き散歩』(新人物往来社、2012年)など。



**近藤秀樹**  
こんどうひでき

大阪教育大学、京都芸術大学、関西大学非常勤講師。京都フランス歌曲協会企画委員。シニアCITYカレッジ(NPO法人シニア自然大学校)で音楽講座を担当。主な論文に、「音楽のアール・ヌーヴォー—植物誌の試み」(山根郁信編『別冊太陽 アール・ヌーヴォー—ガレ、ドーム、ラリックの煌き』、平凡社、2006年)、訳書にV.ジャンケレヴィッチ『遙かなる現前—アルペニス、セヴラック、モンポウ』(春秋社、2002年)。



**佐々木勉**  
ささきつとむ

放送大学非常勤講師、元名古屋音楽大学教授、元慶應義塾大学、立教大学非常勤講師。立教大学、武蔵野音楽大学大学院、ロンドン大学キングス・カレッジ・ロンドン大学院で音楽学、西洋音楽史を学ぶ。主要論文に“The Dating of Aosta Manuscript from Watermarks”(国際音楽学会 International Musicological Society, Acta Musicologica, 第64巻1号、1992年)、訳書に『中世キリスト教の典礼と音楽』(共訳、教文館、2010年)、ガイド・ダレッツォ『ミクロログス(音楽小論)』(共訳、春秋社、2018年)など。



**美山良夫**  
みやまよしお

慶應義塾大学名誉教授。慶應義塾大学文学部、同大学院(美学美術史学専攻)に学ぶ。同大学文学部教授、アート・センター所長、読売日本交響楽団理事等を歴任。専門は西洋音楽史、アート・マネジメント研究。2017年から和歌山県立図書館の南葵音楽文庫調査に従事。主な著書等:『音楽史の名曲』(共著、春秋社、1981)、『フォーレ:ピアノ音楽全集』(校訂等、春秋社、全5巻1986~2006)、『文化観光:観光のリマスタリング』(共著、慶應義塾大学アート・センター、2010)、『徳川頼貞「書庭楽話」』(校註、中央公論新社、2021)



**林淑姫**  
りんしゅくき

早稲田大学文学部卒。旧日本近代音楽館事務局長・主任司書。元明治学院大学大学院客員教授、日本近代音楽史研究。主な著書等:喜多村進『徳川頼貞侯の横顔』(校註、中央公論新社、2021)、『日本の音楽図書館—音楽図書館協議会40年のあゆみ』(共著、音楽図書館協議会、2019)、『近代日本芸能年表』(共著、ゆまに書房、2013)、『秋山邦晴「昭和の作曲家たち」』(編、みすず書房、2003)、『中村洪介「近代日本洋楽史序説」』(監修、東京書籍、2003)

## お申し込み方法

お近くの図書館にお越しいただくか、Webから参加申込書をダウンロードしてご提出ください。

	受付開始日	定員	締切日
南葵アカデミー夏	令和3年 6月11日(金)	各日40名	
秋	令和3年 8月18日(水)	各日60名	定員になり次第締め切ります。
冬	令和3年10月20日(水)		
春	令和4年 1月19日(水)	19日:40名/20日:60名	

※「参加申込書」は、県立図書館および市町立図書館・公民館図書室に設置しています。

※申込書の様式は、県立図書館Webからダウンロードできます。

<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/>

[南葵音楽文庫]→[企画関連情報]→[南葵音楽文庫アカデミー]



# 『南葵音楽文庫紀要』 第4号 刊行

## 目次 CONTENTS

### ■論文・調査報告

- ・林淑姫「徳川頼倫試論（1）一ひと・仕事・時代一」
- ・佐々木勉「南葵音楽文庫収蔵「カミングス文庫」の研究一その沿革とカミングス文庫「音楽書」目録一」
- ・泉健「高野武郎一徳川頼貞『薈庭楽話』の口述筆記者一」

### ■資料紹介

- ・近藤秀樹・井戸慶治「リスト《フン族との戦い》」

### ■関連歴史資料

- ・芹野与幸「南葵音楽堂の建築について一ヴォーリス建築事務所に遺された建築図面一」
- ・竹中康彦「喜多村進宛徳川頼貞書簡」

### ■収蔵資料 目録と紹介

- ・南葵音楽文庫〈重要資料〉の選定
- ・南葵音楽文庫収蔵カミングス文庫「音楽書」目録
- ・南葵音楽文庫 活動の記録
- ・南葵音楽文庫 ミニレクチャー【一覧】

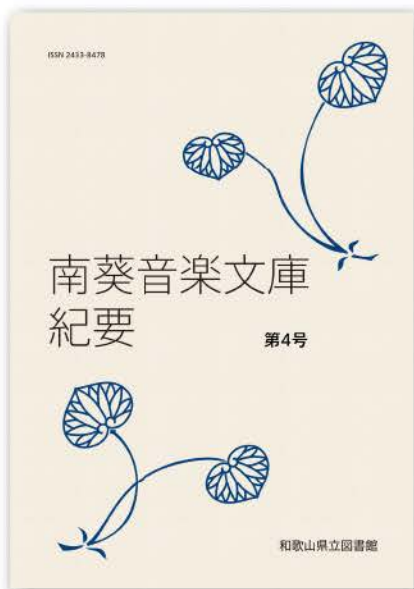
本号から執筆者、寄稿者を挙げ、南葵音楽文庫や徳川頼貞に関連した論文や資料紹介を掲載しています。

約1世紀ぶりに、また『資料目録（貴重資料）』から半世紀ぶりに、カミングス文庫目録新版（部分）を掲載しました。

南葵音楽文庫が和歌山で公開されはじめてから3年間にわたる活動の記録も掲載しています。

### 紀要の配付について【申し込み方法】

和歌山県立図書館・和歌山県立紀南図書館に來館し、所定の申込書に記入してください。郵送による申し込み方法は、県立図書館Web[南葵音楽文庫]→[刊行物]をご覧ください。

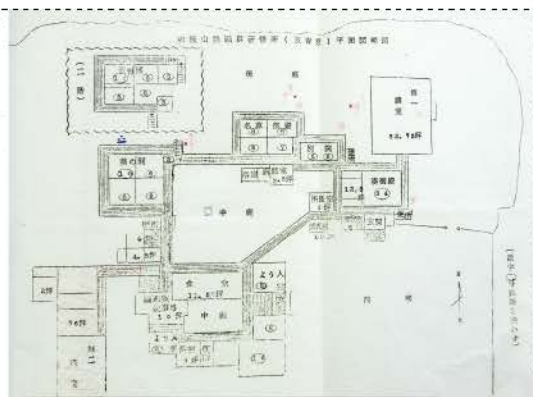


## 南葵の記憶② 双青寮

新和歌浦の双青寮は、1834年に完成、十一代藩主斉順が移り住んだ湊御殿（明治期に一部を徳義社が使用）の奥座敷、1914年に朝香宮鳩彦氏の滞在のために建てられた名草御殿を移築、さらに双青閣などを新築し、紀州徳川300年の事業として徳川頼倫により1920年に整備された。

その後、徳川家の手を離れると、和歌山市岡山丁在住の藤田勝一氏が買い取り、県に寄付。県は職員研修所とし、戦時中は各種の教練の場にもなった。建て替えに際して建物の返還をうけた藤田氏は、1971年に湊御殿・名草御殿に由来する部分を根来寺に移築し寄贈した。

なお、根来寺には、現在の和歌山市金龍寺丁（日赤医療センターの西）にあった吹上御殿（江戸中期）が移築されていたが、1962年に焼失した。



県職員研修所時代の平面図  
戦時中は教練の場にも

双青寮外観



## 『頼貞随想』

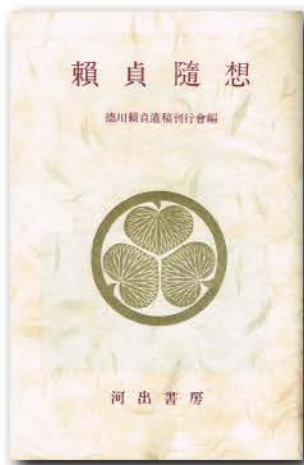
徳川頼貞遺稿刊行会・編 河出書房 1956（非売品）272p、図版4p

「故参議院議員の徳川頼貞先生死後における一切の整理も昨三十年末をもって、円満にほぼ終了しましたが、この整理の際先生が前後4回の外遊間における各種紀行の随筆ならびに藩祖頼宣卿の治績、明治維新の激変に処された祖父茂承の業績、和歌山城、菩提寺たる長保寺、その他に関する随筆が残されていた。」（編集後記より）

頼貞の三回忌にあたり、南葵育英会ははじめ徳川家に所縁のある、また和歌山の篤志家が集い、刊行したのが本書である。

目次からは、他では接することができない随想に加え、3回の外遊とアジアへの旅といった『薈庭楽話』に重なる章も見える。ただ『薈庭楽話』を下敷きにしても、戦前には公開しにくかった話題の追加、こまかな加筆変更があり、そこに時代や頼貞の心情の変化も読み取れよう。より強まった和歌山への、紀州藩への思いも、随所に感得できる。

本書は非売品であったが、図書館には収められている。なお、南葵音楽文庫サポーターによる読書会では本書を取りあげ、『薈庭楽話』と比較しながら読みすすめている。（編集子）



## 南葵からひろがる1冊

南葵文華第4号  
令和3年6月30日発行

発行所  
和歌山県立図書館  
〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

編集  
合同会社芸術資源研究所  
〒640-8329 和歌山市田中町5-1-1 タバビル704

編集協力  
有限会社ティアンドティ・デザインラボ  
〒649-2326 和歌山県西牟婁郡白浜町椿36